

【講演会】

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活

——志いまだ老いず——

川 口 高 風

一、はじめに

岡島秀隆所長先生には、私の履歴を事細かく、また過分なご紹介をいただき恐縮至極です。本当は「宗教学」の最後の講義時間にと思っていました。本日は「宗教学」の最後から本日になりました。今日は天気もよくいつもより少し暖かい好天に恵まれた日で、会場一杯に多くの皆様がご来聴下さいまして心からお礼を申し上げます。

さて、拝見しますと教え子の大学生諸君を始め、教職員の皆様、それに中日文化センターの聴講生、拙寺の檀信徒の皆様など老若男女の顔がみえます。日曜日の夕方五時半になると中京テレビで「笑点」という番組が放送されま

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

す。その中で落語家が一同揃って「大喜利」をやっています。一、二年前の「大喜利」で「18歳と81歳の違い」を比べていました。今日も18歳から22歳の若い学生さんと上方方は「うーん」位な人まで多くいらつしやいます。18と81、数字をちよつとひっくり返すだけですが、年齢としてみると大分違いがあります。

一は、道路を爆走するのが18歳、道路を逆走するのが81歳、本当に逆走して、コンビニとか民家などに突入したりする事故が最近はニュースになっています。

二は、心がもろいのが18歳、骨がもろいのが81歳と。

三は、恋に溺れるのが18歳、風呂で溺れるのが81歳。

四は、偏差値が気になるのが18歳、血糖値が気になるの



が81歳。

五は、まだ何も知らないのが18歳、もう何も覚えていないのが81歳。

六は、自分探しの旅をしているのが18歳、出かけたまま帰る家がわからなくなつて、皆が探しているのが81歳。

七は、東京オリンピックに出たいと思うのが18歳、東京オリンピックまで生きたいと思うのが81歳。

皆さんは笑いますが、今日はその18歳と81歳の方がいっぺんにここにいらつしゃいます。私はどこに焦点を置いてお話をすればよいのか、一番難しいことだと思いましたが、皆様にはそれぞれのところで興味を持っていただければと思います。

ちよつと眼鏡を老眼鏡に替えます。最近目は駄目、歯も駄目で、駄目なところばかりです。歯が抜けて入れ歯、さし歯にしますと言葉がはつきりしないんですね。発音が駄目です。また、固い食べものが駄目です。特に鶏のからあげが一番苦手です。なぜかという、固いために歯が折れたことがあります。

さらに、入れ歯になると言葉の歯切れが悪く、特に「さ

行」が「さすすせず」と聞こえるんですね。講義中に一番前にいた某女子学生さんが私の顔をみてどうしたかといひますと、耳に手を当てて「え？、え？」とやるのです。そして「ジエン」ですか「ゼン」ですか、はっきり発音して「下さいとかわい顔していうのです。これにはまいましたね。また、シヨックでもありました。

そういえば、私が若い頃、校内を年輩の先生が緩歩されているのを見ました。先生は杖をつきながらゆっくりと歩いているのです。御高齢な方ですが、有名な先生なんですよと紹介されたことがあります。自分もその年齢になつてきたのだと改めて認識しましたが、その境地を少しわかるようになってきました。そろそろ引き際であるとも感じっており、今後、ボケないためにも口の体操というか、はっきりした言葉がいえるトレーニングをしたいと思います。と思っています。

そこで、今日は私自身のことをお話ししながら教育、それに研究の両面にわたつて感じていることを述べてみたいと思います。

私は昭和二三年の三月生まれ、昭和二二年の四月以後に

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

生まれた方と同級生です。団塊の世代なのです。団塊の世代というのは一学年が、だいたい二五〇万から二七〇万人。昭和二二から二五年頃は一塊の世代だと、堺屋太一さんがいうのです。

平成二九年の人口は、一学年が一〇〇万人を切っているため、私たちの時と比べると三分の一近くの人口になったということになります。

ですから、私たちの時代は競争の時代でありました。あいつを落として俺はやるんだ、つぶすんだという競争、過当競争です。だから試験の成績もすぐに発表され、友人とはライバル意識を強く持ち闘った時代であつたといつても過言ではありません。

現代は一箇の人間性、人格を尊重する時代のため、私たちの時のような厳しい時代ではありませんが、今は今の厳しい精神的苦悩の多い時代ともいえるでしょう。

私は今ご紹介がありましたように、お寺に生まれた跡とり息子ですけれども、十七、八歳頃は反抗期で、親に反抗して、自分の意志を貫きました。そのため、駒澤大学へ入るにも、仏教学部ではなく文学部の歴史学科に入ったわけ

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

です。その反抗が、後になってよかつた結果となりましたが、駒澤大学に入学してびっくりしました。大学の雰囲気はすごく仏教的で、来てよかつたか、まづかつたかなどいろいろ自問したこともありました。

私を仏教に向けてくれた決定的なことは、大学一年生の十一月に、祖父が亡くなったことでした。お寺ですからお葬式を何度も見えますが、身内の死というものに初めて出会い、それが一番ショックでした。生前中、祖父は私に、何か小さな声でぶつぶつ言っていたことを覚えています。「カンガンパ（寒巖派）」だとか、「愛知県は曹洞宗の寺が多い所だ」とか、いつていました。しかし、当時の私はその言葉が何をさすのかまったく分からなかつた。後になつて分かるようになりましたけれども、そんなことがあつたため、私はどうしたかといいますが、祖父のいうとおり、やはりお坊さんにならないといけない、やらなければいけないという気持ちになりました。そこで発菩提心つまり菩提心を発したのです。少し大げさですが、発心したのでした。そのため二年から仏教学部へ転部しました。

仏教学部に変わりましたが、仏教学部の一年生はインド

の言葉のサンスクリット語やパーリ語が必修です。しかし、他の学部生は、フランス語、ドイツ語、中国語、何でもよかつた。私はフランス語をやっていました。

仏教学部に変わり、外国語をサンスクリット語かパーリ語をやるものと思っていたのですが、「転部した君は二年生からもフランス語のままですよ」と教務課からいわれ、結局は、サンスクリット語やパーリ語は勉強していません。そのためインド仏教に対する知識の劣等感は、ものすごく持っていました。

仏教学部に転部し二年生となり、私は一層仏教に親しみたいと思いい小僧として寺に入ったのです。これには歴史学科の同級生廣瀬良弘君の影響もあつたことは確かでした。お寺では六時に起床し朝のお勤めを行い、本堂や庫裡、境内の掃除をすませて朝食をとり大学へ行くという生活でした。土、日曜日は法要が多く読経三昧、あいている時間があつたら墓地の草取りなどなかなか自由な時間はありません。しかもそのお寺の住職さんは学校へ行くというのではなく、なぜ学校へ行くんだ。法事があるではないか、墓の草を取れなどということです。

反抗期でありました私は、人がやれといったらやらない、やるなというとりやくなる時でした。そのため住職が「何で勉強するんだ。何で学校へ行くんだ」というところから逆に学校へ行き、勉強したくなったのです。まさに住職に反抗して学校に行きました。後に拙著を刊行して送った時、私の学生時代の思い出とともに詫び文と研究費としてお金を頂戴したことがあります。私にとつて反面教師として自分の道を切り開いてくれたよき住職であったと今は感謝しています。

『袈裟の研究』という本があります。お坊さんは袈裟を掛けています。「坊主憎ければ袈裟まで憎い」ということがいわれますが、その袈裟について説かれた本が大法輪閣から発行されています。久馬慧忠老師が書いた本でした。その息子さんが今日、ここへ来ていらっしやいます。まさかと思っただんですけど、本学の数学の先生であります。その久馬老師の本の中に、水野弥穂子先生という方が、お袈裟を縫う会（福田会）を自宅で開いていることが紹介されていました。しかも水野先生の住所まで書いてありました。

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

私はまだ十九歳の大学二年生でしたが、自分の袈裟を縫ってみようと手紙を出しました。そうすると、返事が来まして何月何日の何時から開いているとのことで、尋ねて行きました。そこでは、尼僧さんやお寺の奥様、青年住職、駒澤大学の学生さんらいろいろの方が来ておられ、袈裟を縫っておられました。もちろん袈裟に信仰があるとか、袈裟の教えなどまったく分かりませんが、そこで自然と仏教の教えに親しみがわいてきました。水野弥穂子先生という方は、道元禅師の『正法眼蔵』、『正法眼蔵随聞記』研究の第一人者であり、有名な国語学者でした。

その先生のところまで、私は勉強をさせてもらおうと同時に、プライベートな面までお世話になりました。ちょうど私の母親と同じ大正十一年生まれでした。そのため東京の母親というような気持ちになり、寺の小僧でお金もない時でしたので、もちろん洋食なんか食べたことがあります。そこで、先生には時々レストランへ連れて行ってもらい、フォークやスプーンの使い方などいろいろな教えていただきました。

水野先生は、モダンといったらいいのか、キリスト教の

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

建学精神である東京女子大の出身です。良家のお嬢さんが多い学校で、同級生には瀬戸内寂聴さんがいます。寂聴さんと席を同じくしたことがあったそうで、「寂聴さんは、何で天台宗のお坊さんになったのだろう。道元禅師の曹洞宗の僧侶になるべきだ」とか、いろいろなことをいっておられ、大学時代の思い出話もよく聞きました。

水野先生に親しく教わると同時に、他の先生とも縁ができてきました。プリントの一番「はじめに」のところにあります田中良昭先生は仏教学部に移って最初の授業でした。火曜日の一時間目、「原人論」という授業です。当時、仏教学部へ移ってすぐですから、「げんじんろん」と呼んでおり、仏教というのは人間の原人である北京原人とかネアンデルタール人とか、人間の原点から勉強するものか、すごいなと思いました。

ところが、とんでもない。実はこれは中国のお坊さんの圭峰宗密が著わしたもので、教禅一致の立場から人間存在の根源について論じているものです。書名は「げんにんろん」という本でした。

田中先生は中国禅宗史が専門で、もう一つの授業では禅

学の始祖といわれる達磨の教えとその弟子や法孫らについて教授されました。私が仏教学者となった一番決定的なこととは鎌田茂雄先生の講義を聞いてからです。鎌田先生は、駒澤大学から東京大学大学院へ行って東大の東洋文化研究所の先生になりました。そして、駒澤大学の非常勤講師にも就いていました。昭和二年生まれの先生は、本来、戦争へ行ってお国のために散るといふ教育を受けていました。しかし、それが終戦により、今度は生きることになったのです。「生きるとはなんぞや」という公案を解くために禅に求め、鎌倉の円覚寺などで参禅し、臨済宗円覚寺派の寺院住職にもなりました。

鎌田先生はすさまじかった。「勉強せい」というけれど、その分酒も飲めと。酒を一時間飲んだら、その倍の二時間勉強せいという関係なんです。東大の先生ですが、われわれの隣に座っても身近にお話しして下さる親切な先生でした。

鎌田先生の専門は中国華嚴宗の研究でしたが、みんなが鎌田先生にあこがれ中国仏教の研究をするようになりました。私も南山道宣の『四分律行事鈔』を中心に中国律宗の

研究に進みました。駒澤大学、花園大学、愛知学院大学の先生方には、鎌田先生の息がかかった門下生が多かったです。

次に酒井得元先生です。先生は名古屋出身で、いつも法衣で講義をしていました。沢木興道老師に長く隨身された方で、宗乗の第一人者でした。酒井先生の余談は宗門徒弟の学生の励みになりました。「君はこの出身で、どこのお寺の弟子だ」とよくいわれます。すると、「君のお寺は、昔こういう坊さんが出たところだ」、「君の近くの〇〇寺には、こういう高僧が出ている、こんな著作もあるんだ」とか、「君、しっかりやれよ」と学生を励ましているんですね。

びっくりしたことは、私のお寺に、二十八代目の白鳥鼎三という人がいます。先生は「わしは『従容録』のタネ本に鼎三和尚の書いた『従容録接背録』を使っている。大いに役にたっている」といわれる。しかし、私は何も知らない。すると、「住んでいた寺の弟子が、そんなことではだめだ」と叱咤激励される。君の寺の歴任には立派な人がいるんだから、その人に負けないように勉強なさいと盛ん

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

に励ましてくれました。

そのため、私は宗教学文化学科の専門授業において、学生の出身地や生家のお寺のことを聞き、そのお寺や近隣寺院の話をする、その学生さんは喜び、嬉しがります。そういう教育は、酒井先生からの影響で行うようになりました。

さらに、石井修道さんや石川力山さんという先輩にも恵まれました。特に石井さんは何事にもまじめに取り組む方で、その研究姿勢や方法論を真似していました。石川さんは年齢が四、五歳上ですが、学年は一年先輩でした。国内留学（駒澤大学）の指導教授になっていたのですが、その一年間で『大亀山全隆寺史』を書き終えました。永平寺二十一世の海巖宗突が開山で、開山の研究をしていると、『本光国師日記』から永平寺の宝物が寺外へ散佚したことが明らかになり、その流れを考察したところ、石川さんより評価されたことを覚えています。また、石川さんとはお互いに学位論文の完成をめざし、二人同時に提出することを約束していました。しかし、学位論文は私の方が先に完成したため駒澤大学へ提出しましたが、石川さんは残

念ながらその頃に急逝されました。それは大変ショックでした。出版社とともに法蔵館ということで約束しており、その紹介をしていたのも石川さんでした。

熊谷忠興さんは本日、東京の永平寺別院で行われている永平寺西堂の奈良康明先生の本葬に参加した後、すぐこちらに来るということです。熊谷さんは現在、永平寺後堂の役寮さんですが、永平寺のことなら何でも知っている「永平寺の生き辞引」ともいわれる人です。曹洞宗学の学問的な話だけをいう人で、私が寺院運営に困っている時でも学問的な話だけを述べられ、いろいろな面で助けてもらったことが多くありました。現在でも電話で永平寺の古文書などの確認をするのにお世話になっており、感謝しております。

このような先輩と同時に、よき学友にも恵まれました。廣瀬良弘君は、昨年まで駒澤大学の学長であった先生です。歴史学科での友達で、いつも一緒に勉強をしました。

彼は、東京高輪にある泉岳寺という有名な赤穂浪士が祀られているお寺から小僧しながら学校へ通っていました。求道者ともいえるその姿勢にはびつくりしました。私はそ

の当時、下宿から大学へ通っており、ちゃらんぼらんでした。何もやることがないため当時はやっていたパチンコばかりしていました。名古屋はパチンコの本場であり、私はパチンコが得意でした。東京へ行ってからもパチンコをやっており、ひまつぶしでした。しかし、最近、名古屋はひまつぶしではなく「ひつまぶし」がおいしく有名となりましたが……。何れにしても廣瀬君の真剣さにはびつくりしました。

阿部慈園君は仏教学部へかわって初めてできた友人です。私は仏教をがむしゃらに学ぼうとして、講義を一番前の席に座って聴いていました。すると、いつも私の横に来る人がいる。ベレー帽をかぶり、おとなしく真面目そう、私とはタイプが全然違う。私は寺の小僧をしながら学校へ行くものですから眠くしょうがない。阿部君は隣の席でああだ、こうだとかいって、私は「うるさい、うるさい、おまえ向こう行け」といつもいっていました。

そのうちに阿部君と、だんだん親しくなり、私は禅をもっと勉強したい、阿部君はインド仏教を勉強したいというところで大学院に進むことになり、彼は東大の大学院へ行

きました。

友人はタイプが違う方が仲良くなれるようですね。同じだったらけんかばかりになるかもしれません。こんな二人が最初の友人でした。

愛知学院大学へ奉職した頃には、法学部に林董一先生がいらっしゃいました。先生は愛知県や名古屋の地方史、尾張藩の法政史研究の第一人者でありました。林先生から名古屋についていろいろ教わることになり、また、いろいろな原稿の執筆も依頼されました。

地理学の水野時二先生、歴史学の森原章先生、二人とも愛知教育大学の先生でしたが、定年退官されて本学の教授で来られ、尾張地方の地理や歴史を教えてくださいました。両先生とも林先生同様、この地方史の研究の大家で、森原先生が亡くなった時には、ご子息からお経を読んでほしいとの依頼を受け、葬式もやらせてもらいました。織茂三郎先生と蟹江和子先生は、名古屋市蓬左文庫の学芸員でした。何度も蓬左文庫へ行き古文書の解説を教わりました。何度も同じくずし字について質問するものですから、「ばかだな」と思われていたかと思います。それでも

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

どんどん通って私は教わりました。そのうちに慣れてきて、少しは古文書を読めるようになりましたが、……まだまだ読めない字が多いです。そんなことで、私の研究は中国の禅宗史、中国律宗、『法服格正』、江戸期の曹洞宗学、明治期曹洞宗というように移りかわっていったのでした。

以上のように、私は幸運にも良き恩師、良き先輩、良き友人に恵まれました。それとともに良き後輩にも恵まれました。それが四十二年間の教え子であります。若い学生諸君には良き縁ができることを望みます。良き恩師、先輩、友人、後輩がいれば何でもできるかと思えます。頑張ってください。

二、教育

私は、昭和五十年四月に、駒澤大学大学院博士課程を修了してすぐに本学へ来ました。ちょうど本山から日進に、大学が移転した時でした。まだ学生数もそんなに多くなく、学部も少なかったです。そこで二年間非常勤講師をさせてもらいました。担当した科目が教養科目の「宗教学」で、本学の建学精神を教える必修科目でした。私は二コマ

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学生生活（川口）

やらせてもらいました。二コマは、歴史学科と宗教学科（後に宗教学文化学科）合同の授業でした。当時は宗教学科にも「宗教学」が必修でした。そして、もう一コマが心理学でした。私はまだ二十八歳でしたから、授業は、私とあまり変わらない年齢の若い学生さんばかりで、心がときめきました。今でも最初の授業はよく覚えています。足がガタガタ震え、チョークを持つ手も揺れていたのを覚えています。当時の一クラスは一五〇人ぐらいいました。一五〇人となると大変ですよ。普通は大教場ですからマイクを通して講義を進める方が楽です。私は初めマイクを使用していませんでした。しかし、途中でそれをやめました。なぜかといいますが、学生との距離を近づけようと思ったからです。広い部屋ですから、席はみんなばらばらに座っています。そこで、マイクを使う一方通行の授業はやめて、みんなを前の席に集めました。前から五列目ぐらいまでに集めて地声で講義を始めました。だから授業を一日に二コマすると体が疲れてしまう。マイクでやるのは一方通行で楽です。時々マイクを使いましたが、自分の信念として、みんなを集めて教員と学生との距離感をすごく狭くしたんで

す。資料を配布するのみならず、ノートを取る方法にしました。それは後に、本学の人事課の方から電話がかかり、本学の職員採用試験を行った時、口頭試問で、建学精神どころか、建学精神の仏教の宗派さえも知らない学生がおり、「宗教学では何を教えているのか」というクレーンを受けたことがあります。あれはショックでした。

学生は、愛知学院が曹洞宗であることを知っている人もいますが、曹洞宗の大本山が「大本山延暦寺」というんですね。また、知恩院だとか高野山延暦寺という学生もいたようです。このような答えが返ってくることは、もう少し「宗教学」の教育をしつかりやれということでしょう。それ以来、私は本学の建学精神と、曹洞宗、道元禅師、永平寺、瑩山禅師、總持寺の説明を詳しく行うようにしました。奉職して一年目の時、残念なことが起りました。それは教え子の心理学科の学生さんが亡くなったことです。当時の私は若いため結構付き合いに誘われ、親睦会や茶話会にも出席し学生さんと仲よく親しくしていました。今日も私の第一回目の教え子が来ているかと思えます。もう還暦を過ぎ、六十二歳になっているはずですが。

亡くなった学生は、一家四人が車の中で排気ガス自殺をしたのです。秋頃の日曜日の十二時からのNHKテレビの全国放送でそれを知りました。学校の名前も出ていました。学生の顔写真も名前も出ていました。

それをみた私はびっくりしました。「おい、あれは彼でないか。つい最近の茶話会に出ていた彼じゃないか」と。彼が自殺した原因は、親が借金して、会社の経営がうまくいかなかったためでした。本人は心理学科、弟は高校生、その四人が三重県の伊勢の方で、車の中に排気ガスを引き込んで死んでいたんです。あの時もショックでした。

新聞には、名古屋大学の有名な心理学科の先生が、「何で心理学を専攻している大学生が、親が死のうと言った時に止めなかつたんだ」との厳しいコメントを述べられていました。その先生は名古屋大学を定年後、本学の心理学科の先生として来ているんです。あの縁もびっくりしました。

たまたまその学生の菩提寺が、私の後輩が住職しているお寺でした。そこへ電話をしてみると、誰もお骨を引き取りに来ないため、お寺で預かっているとのこと、四体あ

りました。

そこで、心理学科の学生さんと相談して、彼のために、みんなでお経を一卷でもあげに行こうやということになり、みんなで当時五〇〇円ぐらいカンパして、そのお寺の住職さんに読経してもらったことがありました。そのため学生さんとの付き合いも、あまり一生懸命するともたらなものになると思つたことがあり、それが一番きつい経験でありました。

「宗教学」は、本学の全学部生が受講せねばならない必修科目です。最近はいろいろなところで「あれ？」と声をかけられます。つい最近も、ある葬儀会館で通夜の読経後に「和尚さんは愛知学院大学の先生ではないですか」と聞かれ、実は、僕は何学部で何年前に「宗教学」を受けましたということ、名刺をくれました。私はすっかり彼の顔を忘れており、知りませんでした。彼が私のことをよく覚えていてくれたのです。

こんなことが最近、何回もあるんですね。みんな成長して立派な好青年になっています。「これからも頑張つてやれよ」と声をかけながら励ますことは、やはり教員の冥利

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

ではないかと思えます。

さて、「宗教学」の内容は、「宗教学」、「仏教学」、「禅学」の三種に大きく分かれます。授業では新しい学説も取り入れ、さらに新資料を読む機会も設けました。例えば、資料調査で発見した新しい資料の古文書を、コピーしてみんなに渡しました。私は予習せずに一発勝負ということで、学生さんと一緒に読んでみる。しかし、全然分らない。けれども最後までやっていくと、また同じような字や同文が出てくる。こうではないか、それともああではないかななどと議論することを教えました。つまり、最新なるものをみんなに取り入れていったのです。そして学説も新しいものを取り入れました。そして、できるだけやさしく「宗教学」を教えることにしました。また、この「宗教学」は、他のことにも応用することができました。

それは何かといいますと、お寺での説教や法話、文化センター、老人会などの研修会での話に、「宗教学」での授業の資料が活用できたのです。大学生でも分からないことは、子供や老人などではもっと理解できません。そのため一層それをかみ砕いて説明していかなければならないこと

が分かり、優しく説くようにしました。

また、雑誌や新聞に書くのが一番大変でした。『大法輪』では、たった四、五枚書くのに一カ月かかったこともありました。なぜかといいますと、人にそれを読んでもらう、読んでもらうには自分自身がよく理解していなければ駄目だからです。私は雑誌や新聞の執筆記事をいつも家内に見てもらっています。そうすると読者の目として理解できない文が指摘され、「こう書き直した方がわかりやすいであろう」と、いろいろ建設的な意見を聞くことができました。「宗教学」を担当したことから、これをいろいろな方面に応用していくことができたため、それがよかったです。思っています。

三、研究

研究は、先ほど所長先生より紹介していただきましたが、最初の著書は『法服格正の研究』です。昭和五十一年です。私が二十八歳の時です。二十八歳で初めてこの本を出しましたところいろいろ批判されました。当時はまだうるさかった時代でした。そこで恩師の鎌田先生にお話

をしましたところ、先生から「心配するなよ、悪口なんかほっとけ、そんなものは右から左へ聴き流しておけばよい」とのアドバイスを受けました。鎌田先生も三十五歳で文学博士になり、若くして著書を刊行されたものですから風当りは強かったようでした。

『法服格正の研究』を出版して以来、八事山興正寺に所蔵する書籍や文書、軸などを整理して三十歳で『尾張高野八事文庫書籍目録』を出し、三十四歳で『白鳥鼎三和尚研究』を出すなど若くして本を出しました。出すごとに「川口は早熟だ」とかいわれましたが、これを一生続ければ早熟ではなく本物になると教えられ、いまだに研究に精進しています。ラッキーなことに出版社の社長が私のバイタリティーというか信念というか、それが気に入られ「売れるか売れないかそれはいい、気にするな」ということでどんどん出してくれました。

研究分野をまとめてみますと、袈裟の研究（『法服格正の研究』『曹洞宗の袈裟の知識』）に始まり、江戸期の律者である諦忍律師の研究のため八事山興正寺の所蔵資料を整理させていただきました。それには本学図書館の佐野肇氏

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

や横山和光氏などの協力もあり愛知県立大学、愛知淑徳大学の学生諸君にもお手伝いいただきました。その作業が今の研究の礎となっていることは確かです。

『愛知県曹洞宗寺院集覧』や『愛知県曹洞宗歴任集覧』は昭和五十九年八月に松坂屋で開催された『曹洞禅——郷土の名僧と寺宝——』展で専門委員となり、地元寺院の寺宝調査を行った成果でありました。そこから『名古屋文化形成の背景となった名古屋の仏教の研究』や『鳴海瑞泉寺史』、『龍靈瑞和尚研究』、『幽谷子大薩和尚』、『法持寺史』、『大運寺史』といった地元の高僧や寺史の研究もまとめることができました。特に『法持寺史』は自分の生まれ育った寺院であり、戦災でほとんどの文書などを焼失したため何もなく、他寺院の調査で法持寺のこの記されている資料をコピーしたのがたまたまところからまとめたものでした。

明治期の曹洞宗の研究をすることになったのは、昭和五十五年の永平寺二祖国師七〇〇回大遠忌の時に、熊谷忠興さんが吉岡博道さんが、二祖懷辨禪師の著作である『光明蔵三昧』を、白鳥鼎三が「永平寺僧堂蔵版」として一〇〇

年前の六〇〇回大遠忌に出版していることを教わりました。私はまったく知らなかったのですが、そのため一〇〇年前に活躍していた鼎三さんを顕彰することになり、先輩たちは『永平寺史』を、私は鼎三和尚の研究に一生懸命打ち込みました。興正寺の調査では、有名な尾張七代藩主徳川宗春に関する文書が出てきました。宗春は、八代将軍徳川吉宗に反発して、尾張に遊郭をつくったり、尾張の文化、経済の隆盛に尽くしました。しかし、吉宗は全国に儉約令を出し、謹しむ時代でした。そんな時に尾張だけは元氣よく発展している。幕府からすれば、あれはちよつとまじいやつだということから、宗春は今の永平寺名古屋別院のある所の御下屋敷に蟄居させられました。

しかし、時々八事山興正寺へ行き、私の研究していた諦忍律師といろいろなお話をしています。宗春が蟄居された時、宗春に関するものはみんな集められ燃やされたそうですが、興正寺は大丈夫だったようです。興正寺文書の中に宗春が参詣した時の様子を記した文書がありました。「見せ消ち」といって、墨で該当箇所を消しているのです。宗春に関するものは、ぴっぴつぴと消すんですね。し

かし、それを生かして読んでみると、宗春の行動が分かります。それは諦忍へ御祈禱を依頼したこと、境内で松茸をとったこと、菜飯や田楽、葛かけの冬瓜の御膳を召し上がったこと、タバコを吸ってよいか尋ねたことなどです。また、トイレはお寺のトイレを使わず、用意してきた専用トイレを使っている。

このような今まで分からなかった宗春の行動が、「見せ消ち」を読むことによつて明らかになったのです。それはよかつたということ、林董一先生も喜んで手紙をいただきました。

四、確信できた最新の研究

確信できた最も新しい研究を皆さんに紹介したいと思えます。それは僧侶の掛ける袈裟には五条衣、七条衣、九条衣の三種があります。九条衣は僧伽梨衣といい、僧伽梨衣は二十五条までの奇数条があります。五、七、九条衣はそれぞれの用いる時が違います。私は普段掛けている五条衣の変遷を明らかにしつつあります。皆さんに配布したプリントの裏面をみて下さい。奈良仏教系から禅宗系まで全宗

派の五条衣をあげていますが、各宗派でかなり異なっています。最近までテレビで「ぶつちやけ寺」という番組があり、各宗派の若い僧侶が出演して仏教に関する解説をしていました。私は掛けている五条衣をみれば、その僧侶の宗派がすぐわかります。したがって五条衣には各宗派の特徴が表われているといっても過言ではありません。

奈良仏教系は加行袈裟といつて東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺などの寺院で用いられている五条衣です。

天台宗系は梶井袈裟、輪袈裟、三緒袈裟、紋白、割切五条袈裟などといい、真言宗系も同じ紋白、割切五条袈裟の他に、折五条とか小野塚五条といつて禅宗の絡子を小さくしたものを用いています。

浄土宗系は伝道袈裟、威儀細、大五条、大師五条などがあり、浄土真宗系には輪袈裟、暈袈裟、黄袈裟、小五条袈裟、それに門主のみは三緒袈裟が許されています。日蓮宗系は紋白の五条袈裟、折五条、たすき袈裟があります。

禅宗系は掛絡、絡子、大掛絡などで、掛絡と絡子は同じものです。ただし臨済宗、曹洞宗、黄檗宗とでは絡子の大きさが裏面の布、棹の長さ、マネキの飾り糸の模様などに

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

相違がみられます。

何れにしても、インドでの五条衣は、ここにありますがように腰から下の部分をかくすもので、腰巻きのようなものです。それにひだをつけるとお地藏さんみたいになるでしょう。お地藏さんは五条衣を巻いていたのです。

それでは、私の研究で明らかになったことをいいますと、明治十九年五月に曹洞宗務局より全国末派寺院へ普達された「曹洞宗衣体ヲ齊整スルノ御諭告」をみますと

第一条 両本山並末派寺院一般ノ僧侶各自受用ノ衣体ハ今後両様ナル可ラス

第二条 今後宗内一般ニ五条ハ都テ掛絡ヲ用イ七条以上ハ環紐ナキモノ（謂ユル古規用）ヲ用フヘシ 但七条以上ハ各自身体ノ大小ニ随肘ノ長短ヲ定ムヘシ 掛絡ハ一尺（クジラ）ヲ最小ノ量ト為ス一尺ヨリ小ナルモノハ受用ヲ許サス

第三条 従来流布ノ五条衣修持衣ト称スルノ類及七条以上環紐アルモノ（謂ユル世間用）ハ宗内僧侶ノ被着ヲ禁止ス

とあり、第一条によって明治十九年五月より永平寺、總持

寺の大本山及び全国の末派寺院の袈裟は、各自自由ではなく一つのものに統一しようとしたのです。この背景には両大本山の争いがあつたため、政府のテコ入れにより「宗制」が作られることになったのです。

第二条では、今後、五条衣はすべて掛絡を用いて、七条衣以上は環やそれを結ぶ豪華な紐（総）のないものを用いることにしています。つまり臨済宗のように、環や総のあるものはやめなさいといっているのです。また、掛絡はクジラ尺の一尺を最小の大きさとして、それより小さいものは受用してならないという。

第三条では、従来流布していた五条衣と修持衣といわれるもの、それに環や総のついている七条衣以上のものは禁止されているのです。

私はこの論告により曹洞宗の袈裟は大きく転換したと思つています。この論告により現在の曹洞宗の袈裟となりましたが、それ以前の袈裟は臨済宗と同じようで、また、五条衣も守持衣も用いられていたのです。しかし、現在は五条衣とか守持衣という言葉も聞かず、それらの袈裟もみあたりません。そこで、当時の袈裟を復元し曹洞宗の袈裟

の変遷をみようとしたのです。

改良衣を着ている私の息子がモデルとなって、その変遷を紹介してみよう。

今私が掛けているのは絡子くわすといえます。首から掛け絡うことから掛絡かかくとも呼んでいます。よく見ると五条衣です。五条衣は普段着であり、七条衣は法要や説法を聞く時に、九条衣は導師や説法する時に掛け、人を導く時に掛ける袈裟です。

私は袈裟の研究が始まりましたけど、他の研究も行いました。平成十八年、いまから十二年前になりますが、東京にある五島美術館へ行きました。水野弥穂子先生から、「五島美術館で鎌倉円覚寺の袈裟を展示しているそうだ。見に行きなさい」という電話を十一月下旬にいただきました。十二月三日までの開催でしたので、早速、何とか時間

を作つて行きました。そこで、私はカルチャーショックを受けました。なぜかという、宋から来た無学祖元が掛けていた掛絡が展示してあつたのです。祖元は鎌倉円覚寺のご開山で、生没年は一二六年から一二八六年の人で、道元禪師が一二〇〇年から一二五三年であるところから、大



「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

体同時期の方です。したがって、道元禪師が中国へ行かれた時、このような掛絡をみているはずですし、掛けられていたかもしれません。私はこの掛絡が修理に出された時、円覚寺様をお願いしてレプリカを作りました。それによれば、田相の大きさは縦五十・五センチ、横は一〇八センチあり、大きなものです。現在私が掛けている掛絡はこんなに小さなものです。

ここで、そのレプリカを掛けてもらいましょう。普通从前から掛けてみますと、こんなに大きいものであることがわかります。そのため境内や建物の掃除が容易にできないところから、田相を両脇から折って三つ折りにしました。掛絡については、宋代の『祖庭事苑』などに述べられています。その起源の掛絡がこのような大きいものであったことを知りびっくりしたのでした。後のマネキ（後背ともいう）をみますと、現在の掛絡とは上下反対に棹がなっています。

次に同じくレプリカですが、室町時代の一休さんが掛けていた掛絡が京田辺市の酬恩庵にあります。祖元の掛絡より小さく棹も細くなっています。徐々に小さくなっていく



たことがわかります。五条の田相部分は長いので、タックの部分にボタンをつけてとめてありますが、本物は縫いつけられています。

時代がたつにつれて小さくなってきましたが、同じ禅宗でも曹洞宗、臨済宗、黄檗宗では異なっています。違いが宗派の特徴を表わしたのかと思われれます。

曹洞宗では、これが禅師さんら高僧の掛ける大掛絡です。前から掛けるのではなく、左肩をおおうように掛けます。マネキは折れ松葉といって松でとめていると考えたのでしょうか。ただし、これが曹洞宗で用いられてきたのはいつ頃かは未詳です。おそらく宗派仏教が明確になった江戸期であろうかと思われれます。そして、これが普段掛けている掛絡です。

臨済宗の大掛絡は曹洞宗と違って田相が三条になっており、その間を共色の糸で縦に縫われています。これは前にもいいましたように、五条衣をタックして小さくした名残りからとも思われます。普段の掛絡は曹洞宗より一回り大きく棹も長く環も大きいです。ただ裏面は、曹洞宗が額装のようではありますが、臨済宗は総裏布になっています。高

僧より自分の仏道精進する励ましの言葉を揮毫してもらっています。マネキは△になっています。

黄檗宗は曹洞宗と臨済宗の掛絡を折衷して作ったように、裏面は額装ですが、マネキは☆の星です。また、最近の曹洞宗では檀信徒用として長輪袈裟、中輪袈裟、半袈裟などと称したのも出ています。

ところで、前にあげた明治十九年五月の「衣体ヲ齊整スルノ御諭告」にありました五条衣と修持衣ですが、これは現在の曹洞宗では掛けられていません。しかし、当時まで使用されていたことは事実です。それは全国各地の寺院の調査でみわかりました。五条衣は、このようなもので縦八十二センチ、横一三三センチで、七条衣よりは小さいものです。江戸後期から明治初期に掛けられたもののレプリカがあります。最近、江戸初期に掛けられていたものもみわかり、五条衣は江戸初期にも存在していたことが確信できました。

もう一つの修持衣ですが、これは守持衣とも書き、鳳潭の『仏門衣服正儀編』に「五条守持衣横四肘縦二肘」とあり、五条となっているところから、守持衣は五条衣と思っ

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

ていました。しかし、『法服格正』によれば守持する最後の大ききであり、破片で綴ることから、キリ雑の七条でも九条でもあるといっています。そのため七条も九条もあり、これがそのレプリカです。これは黙山元轟（一六八三—一七六三）の用いていた守持衣です。前から掛けるものではなく横に掛けるもので、奈良の興福寺にある迷企羅像が掛けており、これは守持衣の元のものといえます。また、横に掛けるものは天台宗の比叡山の回峰行者の白五条袈裟もあります。

その他、曹洞宗の掛絡によく似ている浄土宗の威儀細があります。これは掛絡より威儀、つまり棹が少し長く、環はついていません。同じ浄土系の時宗の前五条は、マネキがなく威儀も細くなっています。

このように、宗派によって特徴がものすごくあります。時代がたつにつれ、五条衣はもつと小さいものになってしまいかも知れません。小三衣というお守りのようなものもあります。これはインドの比丘の戒律に離三衣宿戒があり、五、七、九条の三衣をいつも持っておらねば戒律を犯すことになることから生まれたものと思われれます。



そこで私は、道元禪師が掛絡を掛けていたか、守持衣を掛けていたか、五条衣はどのような袈裟を掛けていたかを明らかにしようと思ひ、今でも調査や研究を行つています。まさに袈裟の研究に始まり、袈裟の研究で終わるのではないかと思つています。

五、おわりに

最後に学生諸君に伝えたい。本学の学生さんは少しおとなしく、積極さが無いように思われます。これからは、どんどん頑張つて自分の知らないことを貪欲に求めるといふと思います。

私はこんな経験をしたことがあります。大学院の修士課程から博士課程へ行った頃、曹洞宗宗務庁から出ました『訳註禅苑清規』という本があります。その索引を私がやらせていただきました。鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融各先生より、川口も戒律を研究しているとのことから依頼されました。

昭和四十八年の大学院博士課程二年生の時、二月から半年間永平寺へ安居をしました。永平寺を下りる時、鏡島先

生へ手紙を出しました。その時に書いたのは、九月に永平寺を「こうか」するといって、「こうか」という字を見てください。本当に降るの字で、「降下します」と書いた。それは、他の人もそう書いていたからです。十月に大学へ行ったら、私は大笑いされました。ある先輩から、「鏡島先生が川口は索引も作っているのに、永平寺を降下するのは」と。この場合の「こうか」というのは、「暇を乞う」と書いて「乞暇」というのです。鏡島先生に厳しく注意を受けました。

次に、『法服格正の研究』を出した時、自序に祖父の大和尚に対して「菩提の冥福を祈る」と書いたのです。そうしましたら、榎林皓堂先生から、「大和尚に対する敬語を正しく使うべきだ。菩提の冥福ではなく品位を増崇せんこと」とだて懇切丁寧な手紙が来ました。私は恥をいっぱい書いていたんですね。当時は、まだ禅の言葉が身につけていなかったのです。

ある時、某檀家さんの家へ月参りに行った時、床の間に掛かっている掛け軸の読みと意味を聞かれました。「学校の先生をやっているし、お寺さんだから読めるんじゃない

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

か、読んでくれ」といわれましたが、当時はまったく読めませんでした。これも赤面の至りでした。さらに、名古屋の寺院の住職をやっているのだから、どうして名古屋にはお寺が多いんですか。曹洞宗はどれくらいの数があるのですか。などの質問も受けましたが答えられませんでした。

こういう経験から自分の無知がよくわかりました。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」、本当に無知から始まれば、何も失うものはありません。だから一度ゼロになって、プライドなんか捨てて、質問をし、学ぶということが大切だと感じます。私の研究方法は、すぐ袈裟に関係しますが、袈裟の縫い方と同じだと思います。一般の縫いものは真縫いです。ちくちく縫っていくだけです。袈裟の縫い方は返し縫いです。返し縫いとは、一度縫って半分戻して、また前に進むという縫い方です。どういふことかといえますと、一カ所がほつれてもまだしつかりとしているからです。これは反復練習と同じことです。一度振り返って後ろへ戻り、熟考してまた進んでいくことです。これを繰り返していると、なるほどということが分かってくるのです。

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

今相撲界が賑わっていますが、貴乃花親方が元気な時、テレビでアナウンサーの質問に答えていました。「貴乃花親方の好きな言葉を教えて下さい」といったら、親方は「誇り」と言いました。彼は自尊心をすごく持っていたから、自然に出た言葉でした。続いてアナウンサーは嫌いな言葉を教えてくださいとお願いしたら、「プライド」といっていました。同意ですが受け取り方は違う言葉とされます。

皆さんもプライドなんか捨てて、ゼロから、無知の姿勢で学んでみますと、だんだんと血となり肉となつていくような感じがします。学ぶことは「真似る」という言葉に由来します。永平寺の宮崎奕保禅師がよくいつていらつしました。テレビでもやっておりましたが、自分はお師匠さんの真似をしている。一日真似れば、一日のお師匠さんの真似、一カ月なら一カ月の真似、一年真似れば一年のお師匠さんになる。では、一生真似たらどうなるか。それは、本物になるといふんです。だから、一生懸命に一生やれば、なんでも本物になるといつているのです。

「憧れの鎌田先生と揮毫」というのは、鎌田茂雄先生が

東大を定年になつて本学の日本文化学科の教授としてお見えになった時、おめでとうございますということで、一杯飲みましたけれども、先生が退職される時、今日ここに出席していますが、当時の書道部に所属していた吉岡博瑞君に頼んで、鎌田先生に書道部の部室へ来ていただき、最後に先生の揮毫をいただきました。それは先生の座右の銘であり、『論語』の「一以貫之」でした。孔子が、自分の人生を振り返って見ると、一つのことには打ち込んで貫き通したことをいつています。まさにその言葉を揮毫していただき、大幅であり、立派な字であつたところから、みんな思わず拍手しました。あの時は感激でした。それと横額を書いていただきました。しかし、落款と蔵書印を間違つて押されたため、これらの大幅と額は他にないものだと貴重品扱ひされました。その横額を研究室に掛けています。研究室へ入るたびに、鎌田先生がいつも上から見ていて応援してくれているような気がいたしました。

最後の「志いまだ老いず」は、佐藤一斎の有名な『言志後録』にある「血気には老少有りて、志気には老少無し、老人の学を講ずるには、当に益志気を励して、少壯の

人に譲る可からざるべし」という言葉からできたものです。人間の体力から発する血気には、青年と老人とで大きな違いはあるが、精神よりほとぼしる志気、志というものは、老人と青年の間には違いがない。かえつて老人のほうが、志は高くあるということを佐藤一斎は教えています。よく座右の銘にしている方も多いようです。私もまさに、「志は老いず」ではなく、「志はいまだ老いず」で、一生行ってみようと思っています。

最後に、私も無事に何とか、専任で四〇年、二年間非常勤講師ということで四十二年間愛知学院大学に勤めさせていただきました。そして無事に定年退職できます。学校当局の小出忠孝先生をはじめ、多くのご交流できた教職員の皆さんにも深く感謝いたし厚くお礼を申し上げます。ありがとうございます。また、大病もせず今日を迎えられたということは、家庭にいる家内をはじめ、子どもたちにもささえられたからです。家族にも感謝したいと思います。自分の一生を振り返ると、「宗教学」に始まり、「宗教学」に終わる学究生活でした。また、袈裟研究に始まり、袈裟研究に終わる学究生活ともいえそうです。

「宗教学」に始まり「宗教学」に終わる学究生活（川口）

本日は遠く、秋田、山形、東京、京都からも来ていただき、また、地元の方の多くの方も出席していただき、本当にありがとうございます。18歳の学生諸君、私と50歳違いますが、これからの長い人生を頑張って生きぬいて下さい。81歳の大先輩の皆様、志はいまだ老いずですから、ますます志を高くもって頑張つてやっていただきたいと思えます。一時間半のご清聴、本当にありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。